

## 新島 襄の言葉

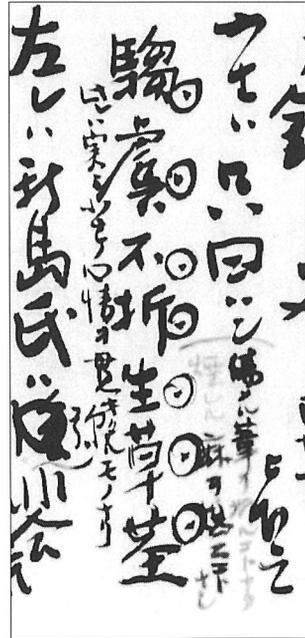
山本 真司

(国際中学・高等学校教諭、  
日本キリスト教団牧師)

傷める葦を折ることなく、  
煙れる麻を熄することなし。

## 騶虞不折生草莖

(小崎弘道宛書簡 1889年6月2日  
『新島襄』全集 第4巻 148頁)



横浜、「みなとみらい」から山下公園や中華街へ向う途中の開港広場近くに、日本キリスト教会横浜海岸教会がある。1872年3月10日創立という。アメリカ改革派教会の宣教師J・H・バラ夫妻が英語私塾を開き、1868年には石造りの小会堂が建設されたことだ。教会の案内には沿革が記されているが、この教会が熱心な祈りによつて建てられ、礼拝を真摯に守り続けていることが印象的だ。「毎週の主日礼拝は、第2次世界大戦中のキリスト教弾圧の時代にあつても一回も欠かすことなく守られてまいりました」。淡々とした表現の中に、あの時代に「敵性」宗教としてのキリスト教を守り抜くことがどれほど困難だったかを想像する時、胸が締め付けられる。

1889年小崎弘道に宛てた書簡で新島は教会合同運動の推進派が少数派を切り捨てようとする姿勢に反対している。「詩経」召南の「騶虞」を引いて、小崎を諫めようとした。伝説によると、この義獣は至信の徳のある人が世を治めれば現れるという。路傍の草すら踏まない騶虞の慈愛に新島は心を留めた。宣教師が詩いた種は合同、分離を経てそれぞれの個性を尊重されて息づいている。苦難の中で欠かさず礼拝を守りぬいた教会に、自由教育、自治教会を基盤に据える同志社が改めて学ぶことが隠されているのではないだろうか。教育環境の厳しさを感じるこの時代に。